

第5回「関西建築家新人賞」審査講評

この「関西建築家新人賞」はJIA近畿支部主催の「関西建築家大賞」の登竜門的位置づけであるという、そのことを念頭に置き審査に臨ませていただいた。

率直な感想として、最近の若手建築家はデザインが上手いと思う。逆を返せば、うまくまとめてしまえて、建築の強さが感じられない、ということでもあるのだが、デザインが洗練されている時代の中、新しいものをつくりだす困難さと大切さを改めて認識した。新しいものをつくりだすという行為にはオリジナリティが重要である。それは、自分がその建築で何が表現したいか？何を実現したいか？ということにつながる。建築が、建築家個人の表現の発露の場であるか否か、という議論もあるだろうが、それでもなお、建築には建築家としての痕跡が残るものである。

さて、今回の審査であるが、各界でオリジナルで意欲的な作品を発表されている2名、ランドスケープアーキテクトとして様々な建築に関わっている三谷徹氏と、グラフィックから家具、建築に至るまで幅広く活躍をされている矢萩喜從郎氏を審査員にお迎えすることにした。

書類審査では、図面、写真はもちろんであるが、設計主旨について重点的に読み込んだ。設計者のデザインの意図や思想がダイレクトに反映されていると考えたからである。特に統一した審査基準を設けず、各自それぞれの視点で審査をしていったが、作品のオリジナリティとクオリティをどのように実現しているかということが共通した認識となったように感じる。

それゆえ、オリジナリティが高く、それを無理なくみせるクオリティがある作品を評価し、既視感が多分に感じられる作品については評価を大きく下げた。その結果、4作品について現地審査を行うことにした。

2次審査である現地審査は、設計者の意図する設計主旨が現実の空間にどのように立ち現れているかを確認するための審査でもあり、また、設計者の言葉をさらに具体的に聞くための審査でもあった。そして、そこではいかに自分の作品を客観視できているかが重要なウェイトをしめていたように思える。

「岡本ハーベスト保育園」(岩田章吾)は細く長いスロープや吹き抜け、斜面屋根を利用した遊べる屋上庭園などの楽しい子供の空間を、限られた敷地の中で、空間を折りたたんでいくことで実現したような建築である。採光をハイサイドライトから取るなど、建築の構成によりタイトな敷地条件をうまく解決している。

難を言うならば、園児に対する設計上の配慮がなされていることは十二分に理解できるのだが、空間のスケールやデザインポキャブラリーが手堅くおさえられており、そのことが子供のための空間とのギャップを生じさせ、それをうまく解決できていなかったという点であろう。

「甲陽園目神山町の家」(岸下真理)は、阪神間の見事な眺望を享受できる、急斜面地に建つ住宅である。設計者が言う「斜面地の登り下りの身体感覚の空間化」に注力し、具現化したことが素直に感じられる作品であった。素晴らしい眺望を生かしきることは

もちろん、建築内部においても、様々な抜けや回遊する平面をつくり出し、広がりある空間を実現していた。

しかし、浴室などの水回りの見せ方や、天井高さやのコントロールや壁面による抑制、内装の微妙な色使いの操作でさらに劇的な体験ができる空間をつくれたであろう。

だがそれらは、この建築の持つ力強さを損なうほどの大きなマイナスではないと考えられる。

「gravillusion」（津田茂）は、造成された斜面地に建つ、向かいが公園という立地の住宅である。スキップフロアの構成と公園側に対して全開できる開口部は、このロケーションとあいまって実に爽快で気持ちの良い空間となっている。空間の構成やプランなど、敷地に対する読み取りとして、実に素直になされていて、好感が持てる。しかし、設計者が設計主旨や作品タイトルとして強調する「木造建築らしくないこと」は、作品のテーマとしては的が外れてしまっている。それゆえ大きく評価を下げってしまったのが大変惜しまれる。

「音羽の家」（中村潔）は、設計者自身の手による自邸に、玄関のスロープと書斎を増築するという規模は小さいが、野心に満ちたプロジェクトであった。複雑で多岐に渡る与条件を薄肉鉄板構造で応えているのが明快で魅力的である。また建築のディテールや素材への感覚は、応募作品の中でも突出していた。

しかし、それらの要素が、小さな空間の中で醸成し切れずに、逆に落ち着きを損なう結果となっていたのではないだろうか。

とはいえ、建築のみならず、選んで置いている家具やアート、プロダクトにも設計者のこだわりとセンスを十二分に感じる事ができた。

以上、4点の現地審査を終え、審査員3人が推挙したのが、揃って「甲陽園目神山町の家」（岸下氏）であった。関西建築家新人賞を1作品ないし2作品を選出するという規定に基づき、その後も、他3作品について、新人賞に値する作品であるかどうか議論し、慎重に検討した。結果、今回は1作品のみに賞を与えることとし、岸下氏を第5回関西建築家新人賞に決定した。

岸下氏をはじめ、応募者全員のさらなる研鑽と、今回を越える作品づくりを期待します。最後になりましたが、現地審査に快くお答え下さった建築主の皆様には厚く御礼申し上げます。

審査委員長 坂本 昭

音羽の家

様々な両義性が作品の魅力として感じられた。自邸の RC 造による簡素な面構成を継承しながらも、そこに R をもつ鉄骨主構造を内包し、その相克の間に空間を位置づけようとする点、動線に囲まれながら成立する静謐な書斎、和の建具に縦長の断面プロポーションなどである。難しいテーマである。このテーマと造形が、出隅で近接する公会堂と社務所との関係を積極的につくり出すところまでいってれば、さらに意義ある増築となっていたと思われる。

gravillusion

在来木造で他構造の空間構成に試みるというテーマが主張された作品である。敷地のレベル差や前面に公園という立地を生かした開口の取り方、落ち着いた素材選択など完成度の高い空間に感じられた。しかし、構造と空間構成への眼差しが、建築家内部の閉じられた議論にとどまりがちであり、「住む」という生活そのものの楽しさをつくり出すことにどのように翻訳されうるのかが見えにくかった。

甲陽園目神山町の家

崖地に近い急斜面にどのような生活空間が成立しうるかという、敷地そのものからのテーマに素直に回答した感のある、好印象の残る作品であった。部屋から部屋への移動の中で生じる縦移動と方向転換が、崖地特有の眺望を切り取り、シークエンスとともに生活の階層性を与える。そうした身体的な空間経験が純粹に追求されている。また、新人応募作品なりのローコストの構造、仕上げの中に、そのコンセプトがよく実現されているのは、背後に相応のスタディーが積み重ねられたであろうことを感じさせる。部屋割り型でない住居計画と施主の生活のあり方の間に、現実的な接点をしっかり見定める丁寧な熟慮も感じられた。

岡本ハーベスト保育園

保育の生活パターンを、立体回遊型とも言える建築構成におさめたこと、マスとヴォイドの相関によって見る見られるの豊かな空間関係を創り出そうとしていることなど、空間造形のテーマが明確な作品である。また保育園でありながら、大人の本物の空間を与えようという意図もすばらしい。それでもその中に、子供の生活の場でなければ実現し得ないなんらかの空間の質が、もう少し追求されえたのではないかと、手摺、階段、開口などの部分部分に、作品または作家なりの独自のディテール造形がもっとあり得たのではないかと、残念であった。

審査委員 三谷 徹

応募された作品の中から現地審査になる作品を選ぶこと、その中から受賞者を決めることに際して、わたしなりに考えた基準は、革新的な試みで、更にクオリティが認められる作品であるかどうかだった。ここで語る革新的な試みとは、創造する状態を必須とする。創造とは、本来の意味で言えば、未だ見たこともないことを世の中に初めて問うことである。革新、あるいは創造の意味を厳密に言えば、あまりにハードルが高くなる訳で、“的”を用いて革新的という言葉を用いたのはそのことに因る。また、クオリティとは、ディテールまで心を砕く、その所作が認められるものである。建築作品にその両者を盛り込むことはなかなか難しい。革新的と認められても、そのことを最終的にディテールを調停することまで意識できずクオリティが感じられない状況、あるいは全体的に見てクオリティを感じさせることができたとしても、観る者に、初めて出会った時にこそ感じられるような高揚感がなければ、それぞれ魅力ある建築作品と看做せなくなる。

この様な観点を持ちながら更に選考に深く関わることとして考えたのが、「言葉」の使用に付いてである。設計者なら様々な言葉を思い描きつつ、次第に幾つもの言葉を振り払って、自分に最適な言葉を誘い込む筈である。だから、設計主旨として書かれたものを読む側は、最終的に、設計者自身が考える骨格を説明する言葉として捉える訳で、その言葉が、現実の建築の様態に対して理に適っているかが問われることになる。

受賞作品、岸下真理氏の「甲陽園目神山町の家」は、標高 100 メートルの急斜面に建てられている。斜面そのものの有効活用を目指し、縦軸方向に自在性を持ちつつ連続性のある空間構成を行なった住宅だった。「段状に出現する各空間の用途をあまり限定せず、それぞれ特徴を持った空間が緩やかに重なりながら繋がっていくことを目指した」と設計者の主旨を読んでも、その中に示されている言葉が素直に受け取れた。急斜面を敷地にしていることを活用し、大きなガラス窓を配して、手堅く眺望を魅力の一つにしたことも評価できる。住宅を縦軸方向に徘徊していると、35 年前に訪れたイタリア、ナポリから船で向かったプロチダ島のパステル色に彩られた集落の内部空間を思い出した。プロチダでは、港に面した道のレベルから、急斜面全体に貼り付いたかの様に、縦軸方向に驚く程自在に、大きさも様々な家が連続している。そして、家と家の隙には内部空間としての通路があった。そこをくねくねと登っていくと、丘の上にある道に辿り着く。建築家が関与せずに、長い時間を掛けて生みだされた、実に刺激に満ちた空間だったが、それを住宅で再び味わうことになったことは一つの発見だった。

審査委員 矢萩 喜從郎